

「生と死」を考える市民運動の歴史と継承に触れて

— 第21回日本生命倫理学会年次大会 運営報告 —

早稲田大学人間総合研究センター

川上 祐美

はじめに

去る2009年11月14日・15日、第21回日本生命倫理学会年次大会が神奈川県横浜市の東洋英和女学院大学にて行われた。大林雅之大会長や鈴木利廣学会事務局長の指揮のもと、極めて若手中心ともいえるフレッシュなメンバー構成の実行委員会と、東洋英和女学院大学の教職員の協力による運営がなされ、当日は延べ400人を超える参加を頂いた。

各講演や演題、討議の内容については、日本生命倫理学会情報委員会既刊のニューズレター(2010.2.24, No.43)や学会会報No.35(2010.1.26,発行)などによって報告されているため、本稿では筆者が大会事務局長として携わった企画運営や当日の出来事に触れながら、改めて大会の意義を振り返ってみたいと思う。



1. 東洋英和の死生学からの発信

当年次大会の大会テーマは「バイオエシックスを未来に！」であったが、その副題の「「生と死」を考える市民と運動」は、会場である東洋英和女学院大学に設置されている四つの研究所の一つ、死生学研究所の後援があったことが関係しているといえる。

同死生学研究所は2003年に発足して以来、死生学に関する様々なプロジェクトが進められている。中でも、生命倫理学会員も含む学内外の講師による毎年10回ほどに及ぶ公開講座の開催や、2005年創刊の『死生学年報』の刊行など、臨床のいのちの問題を見据えた上で、宗教・哲学・美術史・人類学など多彩な領域にわたる死生学研究が蓄積されていることが特徴である。渡辺和子所長(宗教学)には当大会実行委員としてご助力頂き、大会企画シンポジウムI「市民運動としてのバイオエシックスと死生学」をオーガナイズしていただいた。

大会運営の話とは少し逸れるが、準備期間中の昨年夏に、大林教授が死生学研究所のプ

ロジェクトとして英国から Geoffrey Hunt 教授 (Centre for Bioethics & Emerging Technologies, St. Mary's University College, UK) を招いて開催された研究会に、筆者も参加させてもらったことがあった。終了後の懇親会で Hunt 教授が、「‘Thanatology’の日本語訳は、なぜ『死学』ではなく『死生学』なのか？」と質問をされたのに対し、大林教授は、道元研究にも関心をもつ Hunt 教授に “Dogen said, ‘life is death, therefore death is life.’” と、佛敎的生命観を端的に表した返答をされたことを覚えている。

ここに象徴されるような、生と死を一つのダイナミックな事象として捉える日本ならではの死生学の一端を学ぶ機会を得たことは、筆者の個人的な研究活動においても一つの転機となった。

2. ケアの精神に根付く運営協力

東洋英和女学院大学において豊かな宗教的基盤をもつ死生学が展開される理由に、同大学がプロテスタント系スクールであることも影響していると考えられる。それは学問領域のみならず、大会運営中の随所に感じられた。

大学の規模に依るともいえるが、学会員の先生方はもちろん、教務課や情報技術職員の方々からも細微にわたって多大な支援を頂いた。また、会場設営から大会当日運営を担ってくれたのは、実行委員の坪井龍太先生 (教育学; 東洋英和女学院大学) 指導下の教職課程の学部学生さんたちであった。他学からの実行委員には不慣れなキャンパスの中、アルバイト学生さんたちの臨機応変で献身的な働きがあったために大会運営が成功したといっても過言ではない。また、年次大会初の託児サービスとして、人間科学部人間福祉学科の2名の学生さんが重責を担ってくれたことも特筆すべきことである。

大会参加者から感謝の声が寄せられたエピソードとしては、大会当日の昼食時、会場内のコンビニで弁当の引き換えが予想以上に混雑するという事態になった際に、たまたま部活動で登校していたテニス部の学生さんが、レジ前の長蛇の列を見かねて (もちろんアルバイトスタッフではないのに) レジ回り業務に応援に駆けつけてくれたことであった。

その他懇親会の余興では、ハンドベル部による心温まる演奏が供されるなど、郊外の小さな森の中に位置するミッション系大学で手作り感あふれる運営になったが、このようにケアの精神の伝統がしなやかに受け継がれていることを、学生さんたちによって逆に感じさせられる経験であった。

3. 市民運動の先駆者らによる統括と次世代への継承

大会テーマのもう一つの大きな要素である日本におけるバイオエシックスの「市民運動」について歴史的に展望することも、当大会の大きな目的であった。とくに今回は、日本のバイオエシックスの草分け的市民運動家でもある木村利人代表理事の任期下での三回の年次大会のうちの最初の大会であり、木村代表の提唱する「世界のバイオエシックスをリードする一三つの C」すなわち、「超学際的な<協働 Collaboration>、新たな学問的・実践

的飛躍への〈勇氣 Courage〉、そして、不正の構造の変革への〈挑戦 Challenge〉」を実践しつつ、ともに未来を目指す第一歩となる位置づけとして進められた。

その木村先生の意思に賛同し長年医療訴訟などに尽力されてきた鈴木利廣弁護士による特別講演「患者の権利運動とバイオエシックス～弁護士 33 年を振り返って」は大好評を博し、日本における市民運動の第一線を担う人々の軌跡を再認識する重要な機会となった。

またもう一方で「三つの C」の指針を受けて、若手の活躍を促進する試みとして企画委員会によって企画されたシンポジウム「先端医学と協働する生命倫理」が河原直人実行委員長を中心に編成され、医科学研究と生命倫理との連携の重要性を改めて明らかにした。このような若手シンポジウムの企画は、今後の年次大会においても引き継がれていく予定である。その他、公募シンポジウムの中には「バイオエシックス・カフェ」と称する対話を重視した新しい形式のものが行われるなど、若手研究者による革新が目立った。

そして、木村代表による総会は例になく多数の参加者があり、未来へのメッセージを発する一つのセッションのようでもあった。生命倫理学会のあり方に対して新たに提唱された「S.O.S.」すなわち、バイオエシックスに関する具体的な〈問題解決 Solution〉の努力、従来の専門分野に閉じこもることのない〈開かれた Openness〉学会、社会的貢献の一環として学会による〈サービス Service〉を行う、という代表の言葉を聞き、これらを今後具体的に実現するよう、会場の参加者がそれぞれに気持ちを新たにしたのではないだろうか。

おわりに

事務局の任期中、毎月一回東洋英和女学院大学の六本木校地で行われた実行委員会は、木村先生に縁の深い先生方やかつての木村ゼミの卒業生・関係者が多く集まったため、筆者にとっては同窓会のような和気藹藹とした雰囲気の中進められ、大会事務局といえども楽しみも多い運営であった。その中で諸先生方や先輩方に多大な支援と励ましを頂いたことに、この場を借りて深く感謝したい。

これから、今年の藤田保健衛生大学での第 22 回大会を経て、来年は早稲田大学が再び会場となる。1994 年に木村利人大会長によって行われた第 6 回大会以来である。その際に一つの集大成を描く一端として、学問的にも運営的にも何らかの形で再度貢献できるように精進したいと思う所存である。

(かわかみ ゆみ / バイオエシックス)